

時代の風 西水美恵子 元世界銀行副総裁

元世界銀行副総裁

政治が貧困問題に焦点を当てようになった。大変いいことだ。が、しばしば視点が「人ごと」と感じるのは、私だけだろうか。

数年前、某政治家に、日本に貧困などあるのかと聞かれ仰天したことがある。

「途上国のように1日1ドル25¢以下で暮らす人はいないでしょう」と。世界銀行が策定する絶対貧困層のことで、最低限の生活必需品を買えない所得層と考えられている。

自動販売機に残る釣り銭を探し回るホームレスの人を見たことはないのかと、反問した。そう言えば……目にしたのを見ていなかった」と恥じる彼のつぶやきに、ブータン国王、暹羅王5世の言葉が重なった。貧困は目に見えない」

当時は皇太子だった国王に、貧困解消を使命とする

無意識の怖さ

世銀で働く自分にも見えない頃があったと、白状。話し込んだのを覚えている。

世銀の現場である途上国のスラム街や農村を幾度も視察し、貧しさを知ったつもりでいた。が、危険から身を守る動物本能が働くのか、人間の脳は痛いことや嫌なことを避けるようにできているらしい。パキスタ

った。とはいえ、船乗りは航海路を委ねる術を持ち、漁師なら大漁旗を掲げて母港に戻る夢がある。貧村で世話になったアマお母さんには、飢えにおひえながらも痩せ地にしがみつく以外に術がない。険しいヒマラヤの獣道を往復する時間、日に3回、水くみに費やす生活。夢はおろか、自分のための時間さえせいたくた

た。死ぬまで同じことを繰り返すであろう日々を、アマは「人間が営む生活ではない。獣のようにただ体を生かしているだけ」と言った。板子一枚下どころか、薄水の下に死に神がいた。より恐ろしかったのは、それまで貧民を見下していた自分を見たことだった。「博士は役立たずと朗らかに笑っては逆境を生き抜

くさまざまな英知を伝授してくれた、無識なアマ。私を娘と愛おしんでくれる彼女の真心に触れた瞬間、号泣。自分という服が表にひっくり返って、両眼が開いたような気がした。うまく言葉にならないが、あの感触は今も体に残っている。無意識な偏見だったとはいえ、無意識だからこそ怖い。天の采配ひとつで、自

を除いた可処分所得を、世帯人数で調整した所得の中央値の、そのまた半分以下の所得層を指す。昨年公表された「国民生活基礎調査」によると、年間約122万円未満で暮らす世帯が日本の相対的貧困層。四半世紀ほど増え続けており、その割合は国民の16%を超え、先進国なかでは最悪に近い。6人に1人もの同胞が、毎月10万円に満たない収入の生活苦にある。もしも、その1人が他の5人の目に見えない」

目に見えない「貧困」

ンの貧村で優秀な支援活動をしてきた現地NPOの会長に「無知同然と笑われ、一念発起。彼に頼み込んで、カシミールの貧村にしばらく滞在した。(参照・拙著「国をつなぐ」という仕事」英治出版)

海の子の口癖「板子一枚下は地獄」に通ずる体験だ



一竹内紀臣撮影

分がアマだったかもしれないという観点が、目線になった。以来、自分の目で現場を見極めずに経済政策を考えることをやめた。

絶対貧困層でさえ「見えない」のなら、国際比較によく使われる相対的貧困層はなおさらのこと。国民の等価可処分所得(税金など

を親として守り、兄として慈しみ、そしてあなたたちに息子として仕える」と。その背景には、皇太子時代から全国各地の草の根で会った、国民一人ひとりの顔がある。

標高数百メートルから数千メートル道なき道を歩く国王の旅は、集落ごと一軒ずつ訪ね回り、時には食事を共にし、宿を借り、胸襟を開いて語り合う旅。そうして会った民は、すでに人口約75万人の3割を超えたと聞く。

現場に根付くガバナンスは貧困解消にも欠かせない。国王は政府の次世代リーダーらと旅を共にするのを重んじる。すでにその効果は、21世紀のニーズに沿った農村改革や、公正かつ質の高い教育への改革などに、表れ始めている。

わが国の小選挙区は、ブータンより小さい。